

## 仮面と人形の待つ家 —インドネシア・バリ島

インドネシア・バリ島。熱帯雨林に抱かれた村マスには、数千もの仮面や人形が展示・收藏されている館がある。そこで待ち受けるのは、仮面と人形に宿る魂か、それとも人間のもつイメージの力か。



### 仮面と人形の家を訪れる

インドネシアには、豊かな仮面・人形文化が存在する。仮面舞踊や劇、人形劇や影絵などの芸能が人びとの娯楽として親しまれていることに加え、それらが儀礼の一部として上演されたり、また仮面や人形自体が神格や霊力を宿す御神体のような役割を担っていたりする地域もある。

バリ島とジャワ島を初めとするインドネシア各地の人形や仮面を一度に見ることができるところがある。これが、今回紹介するステイア・ダルマ 仮面と操り人形の家 (Setia Darma House of Masks and Puppets) だ。中部バリの代表的な観光地ウブド (Ubud) から南に下ったマス村にあるこの「家」は、その豊富なコレクションや、手入れされた心地よい庭、そして各地の伝統建築を取り入れた建物によって、バリのなかでもユニークな魅力をはなっている。

### 手ごわい博物館

展示のほとんどがガラスケースのなかに入っていない点は、民博と共通である。また使用跡の少ない(あるいはまったく使用されなかったことのない)比較的状态の良いものが揃っている点も特徴である。実際の芸能上演では、演者の家系で受け継がれ、時間とともに変色して小さな傷の沢山ついた歴史ある仮面や人形に出会うことがある。こういった古びた表情には特別な味わいがある。他方この展示では、職人が技術をつぎ込んで作った仮面や人形の多くがきれいに保存されており、鮮やかな着色の細部までを楽しむことができる。

展示品はとにかく豊富である。影絵芝居や人形劇では、ひとつの演目を演じるために、数十体の人形が使われる。これらの人形がずらりと並び光景には圧倒される。ひとつひとつと目を合わせたくなるからだろうか、一回の訪問で全部を観てまわろうとすると、へとへとになってしまう手ごわい博物館でもある。八〇〇点前後にのぼる人・神々・動物たちをモチーフにした作品の数々を見ると、我々人間はかくも豊かに顔を表現してきたのだということを実感する。

### 資料? 作品?

展示物に関しての文字による説明はほとんど無いが、仮面や人形の名前、演目名、作られた地方名が記され、また多くのものについて、作者の名前も表示されている。これが、民族学の一般的な博物館展示と大きく異なる点である。それぞれの展示物は、演目や地域を代表する資料であると同時に、作り手の作品でもある。筆者は、バリの仮面舞踊劇を専門に研究していることもあり、仮面には特に目がゆくのだが、バリのシンガパドウ村の仮面作りの名人イ・ワン・タングー氏の作品は、数も多く、存在感を放っている。インドネシアの各地域のなかでも、加工が細かく洗練された印象をうけるバリの仮面。そのなかにあっても、タングーさんの作品は繊細なつくりで生き生きとした表情を見せている。ちなみに民博では、現在タングーさんの仮面を購入し展示する計画が持ち上がっている。これがかもし実現すれば、数年後タングーさんと息子さんたちによる仮面が、リニューアルされた東南アジア展示場で皆さんを迎えることになる。

### 世相を映す仮面と人形作り

この博物館が収集しているのは基本的に「伝統芸能」とよばれるジャンルの仮面や人形である。コレクションの重要な部分のひとつであるワン・クリット (Wayang Kulit 影絵劇) は、世界文化遺産にも登録されている。しかし、この博物館では「遺産」や「伝統」という言葉が想起する歴史的で重々しいイメージを軽やかにすり抜ける、ユーモアや、現代性や、大衆性を帯びた仮面や人形も数多く収集されている。例えばオバマ大統領の姿の操り人形、アニメを題材とした影絵人形なども展示されている。なかには博物館の展示のために特注されたものもあるようで(例えばこの博物館のオーナーをモデルにした人形もある)、すべての仮面や人形が実際の上演に使われ得るものなのかは不明であるが、少なくともインドネシアの仮面作りや人形作りが、世相を反映しながら、現在も生き生きと息づいていることを理解できる。

吉田 ゆか子  
民博 機関研究員



オバマ大統領の人形



アニメを題材とした影絵人形



タングー氏の工房で作られた仮面



地方色豊かな建築を用いた展示場の内部



緑豊かな村の一面にある